

建築家の

往復書簡

原広司 — 磯崎新

12
.....

結局のところ私たちは、
ラディカルな虚構性の提起に
生きています…

幾崎新様

HIROSHI HARA

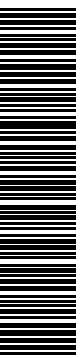
原広司

時は、なんの後悔も許さず、ましてや、なんの歓喜も許さず、気づいてみれば、冷えた流れの無慈悲な軌跡に、茫然と立ちすくむばかりです。往復書簡の初めから、三年の月日

が経ってしまい、私には、もう少しましな働きができた筈だったとも思いますし、一方では「それは無理だろう」とのあきらめもあります。それはともかく、最初にお会いしてから半世



私の「夜明け」の年代的風景。「夕暮れ」をどう描くか[図版提供:アトリエ・ファイ建築研究所]



9011256100

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

トステム・INAX・新日軽・サンウエーブ・TOEXは、株式会社LIXIL(リクシル)の製品ブランドです。
株式会社LIXILはお客様の多様なニーズにお応えする商品とサービスをお届けしていきます。

紀ほど経って、再びあれこれと教えて頂いたことに、心から感謝申しあげるとともに、この往復書簡の機会と場をしつらえて下さった方々、また、寛容にもお目通し頂いた読者の方々に、限りなくお礼を申しあげたいと思います。

それにしても、建築する作業は、誠に魅力に富んだ作業であって、リアルとイマジナリが、こちゃまぜになって、磯崎さんが当初から話題にされた「現場」が形成され、それ故、「世界のなりたち」にかかわらざるを得ない事態に投げ込まれ、そこではコスモスが優位である筈もなく、カオス混沌が支配的である――。

しかも、混沌はものに近いとする優れて建築的な指摘。磯崎さんが、少し前に、画かれていたスケッチのいくつかに、『莊子』に由来する側面もあるのか、と理解しました。拝見した当時は、ある種のフロアに関心を持っておられるのかなと、推測してはいたしましたが。

応帝王篇の七は、「孔」に対する批判でもあります。この有名な比喩の挿話は、「混沌」に、人間も持っている七つの孔をうがつと、七日間で死んだとしております。これは、すなわち、反『創世記』と申しますのも、私は建築の起点に、

閉じた空間に孔をうがつ、を据えてきたからでもあります。が。

このメタフォリカルな挿話は、建築のフィクションナリテイに深くかわつていきます。何故なら結局のところ私たちは、ラディカルな虚構性の提起に生きているからです。実在する建築は、いずれは全て消える。が、建築のフィクションナリテイをめぐるイメージは、消えることはありません。もし、これが、建築の美学であるなら、「世界のなりたち」は、美学の領野にあります。

少しわき道にそれますが、年末年始にかけて、人々が意識現象についてどのような見解をとってきたかを復習し始めたのです。例えば、カントの『純粹理性批判』、フッサールの『イデーン』等々（井筒俊彦さんの『意識と本質』も参照しました。すると歳をとらたからでしょうか、極めてよく理解できる、と同時に、文字通り気持が悪くなるのです。その理由は、純粹であるとか、本質であるとかが、「神の代役」として登場し、つまりそれらは、「始めから死んでいる」からです。

さて、混沌にもどりますが、これを、アイデアとしてとらえ

混沌の心

ARATA ISUZAKI

磯崎新

原さん、土壇場になって、こんな手紙であいすみません。先月、心臓血管外科というところに入院、手術を受けました。その結果の3D写真のコピーをもらいました。色付きだとグロテスクなので、わが家のFAXでボヤケたまんま送ります。

3・11のとき中国におり、帰京できず漂流生活を送り、帰宅直後、倒れ、入院しました。このときは原因不詳、もう治癒したといわれ、帰宅したのです。さらに検査が繰返され、内部被爆すると思われる核医療科にまわされ、他の病院でも同様な検査が行われ、暮までにわかったことは、「大動脈に数十センチの解離が起った。それは奇蹟的（この表現が問題！）に自己治癒しつつあるが、その根本にあるUチユ

ーブ（冠状大動脈）が膨張、破裂寸前。そのリスク発生確率は東京の直下型地震に等しい。即手術せよ」というものでした。

紆余曲折あり、麻酔がさめた後にわたされたのが、この3D写真で、「ステントグラフト」という手法で瘤が内貼りされている。ただし、幹からでて重要な枝の一部がふさがれた。いずれ、他の血管から逆流するので、問題ない（この言も問題！）と西洋医がいうのです。東洋医ならホーリズムですから、当然の言ですが、彼らのセリフじゃないぞ、と体内の血液が乱流を起していることを感知し、老人性・災害性「うつ」に違いない。何にも書けない、と編集事務所を困らせているのです。



ステントグラフト手術の3D写真[図版提供:磯崎新]

ると、「始めから死んでいる」となる恐れがあります。もはや死に面している状態が日常化している私たちの世代にとって、混沌はリアルな事態です。つまり、私などは、これまでの書簡から推察して頂けると思いますが、死への見通しが立たず、うろたえれば、「私が混沌である」と叫んでしまいうるのです（私は、美学は美学から生まれにくいと考えています。そこで、止めればよいのにまた数学ですが、現代幾何学に、ホモロジー完全系列、と呼ばれる図式があり、これが消える様相の説明にかかわっているように考えてはいます）。

長い間、ありがとうございました。若い頃、建築のワールドの拡張をデザインの拡張とする風潮もありました。そうではなく、見渡す、見通す等々の視座のとり方は、全く磯崎さんの教えによるところです。混沌は、磯崎さんでない、イメージできないでしょう。ますますお元気で、冴えわたるイメージを、私たちに提示して下さい。

二〇二二年二月二〇日
原広司

そのひきこもり状態で、いまピンとキリの両側の方々に同情もっています。

ひとり私は私と同時期に、同じ外科で手術された今上天皇。折口信夫の「天皇霊」説に従えば、その身体はフラジャイルな容器であるから、傷つけてはいけない。「霊」がもれる。といいますから、今上天皇は「〇〇殻」の身となっております。それでも「王の身体」として「統治」シンボルの役をさせられている。おイタワシイかぎりです。もうひとつの極の人々はフラクシマ第一の高放射能のなかで現場作業をさせられている非組織労働者たち。その多くは山谷、釜ヶ崎から派遣されているといえます。四次から五次の下請け手配師の仕事と聞きます。こちらは「安全」を保持するため、英雄とおだてられている。いまや阿呆船か、と思えるこの列島の「統治」と「安全」を保持（サステイン・サバイヴ）するのは、こんな具合に身体を張っている連中だけになってしまった。小林秀雄が誤訳したと評されているランボウの詩では酩酊船でしたが、これは阿呆船と同義でありました。わが王も、わが非組織労働者も、身体を張ってくれています。ステントグラフトがそんな役をしてくれるといいますが。

二〇二二年三月二十九日
磯崎新

はらひろし——建築家（一九六六年生まれ、一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所一九九七年、退官、同名客教授。一九七〇年よりアトリエアライ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司+アトリエアライ建築研究所所属。いそざき、あらた——建築家（一九三三年生まれ。一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。